

鼻汁・副鼻腔貯留液より検出された肺炎球菌とインフルエンザ菌に対するニューキノロン系薬の感受性

池田勝久¹⁾ 廣津幹夫¹⁾ 三澤成毅²⁾

1) 順天堂大学 医学部 耳鼻咽喉科

2) 順天堂大学 医学部附属順天堂医院 臨床検査部

急性鼻副鼻腔炎においては肺炎球菌とインフルエンザ菌が2大起炎菌であり、 β -ラクタム系薬剤耐性が治療上の問題点となっている。今回、当施設での鼻副鼻腔からの肺炎球菌とインフルエンザ菌の臨床分離株を用いて、ニューキノロン系抗菌薬の感受性について検討した。対象は平成23年1月から平成24年2月までの当科において採取された鼻副鼻腔からの肺炎球菌とインフルエンザ菌の臨床分離株である。薬剤感受性は、米国 Clinical and Laboratory Standard Institute 標準法による微量液体希釈法にて最小発育阻止濃度 (MIC) を測定した。肺炎球菌のペニシリン感受性は経口ペニシリンの基準を用いて3種 (PSSP, PISP, PRSP)、インフルエンザ菌は ABPC 感受性と β -ラクタマーゼ検査で4種 (BLNAS, BLNAR, BLPAR, BLPACR) に分類した。肺炎球菌は PSSP (n=27) では、GRNX と STFX の MIC 値は $\leq 0.06\mu\text{g/ml}$ 、LVFX は $0.25 - 1\mu\text{g/ml}$ に分布した。PISP (n=20) では LVFX は $0.5 - 16\mu\text{g/ml}$ に分布し、耐性株 ($16\mu\text{g/ml}$) が認められた。LVFX 耐性株の GRNX と STFX の MIC 値は、それぞれ $1\mu\text{g/ml}$ 、 $0.25\mu\text{g/ml}$ でその他は $\leq 0.06\mu\text{g/ml}$ であった。PRSP (n=2) では GRNX と STFX の全例で $\leq 0.06\mu\text{g/ml}$ 、LVFX で $1 - 2\mu\text{g/ml}$ に分布した。インフルエンザ菌は BLNAS (n=44)、BLNAR (n=2)、BLPAR (n=2)、BLPACR (n=2) の4種ともに GRNX と STFX の MIC 値は $\leq 0.06\mu\text{g/ml}$ 、LVFX の MIC 値は $\leq 0.06 - 0.12\mu\text{g/ml}$ に分布し、耐性菌は認められなかった。GRNX と STFX は、ペニシリン耐性肺炎球菌とアンピシリン耐性インフルエンザ菌に対しても優れた抗菌力を示した。